對酒不覺暮
落花滿我衣
150

鬼物(オニバケモノ)を畫くはやすく狗馬は難しといふは
宜なるかな古人乃確言(クワクゲン)(ウゴカヌコトバ)か畫は眼前の萬
象をうつすにより、それ乃ミ寫し得んや目力を盡し
心思を費さずしてハ鳥も飛んと欲し人ハ語
らんとはなし無益なしく雪さむき情くもかきゝ
ゆく今年戴斗翁の妙手何ぞ余の一言を待ん余
特に翁の心を用ゐる乃深く厚きに服せり心は
畫にあらはるゝ事をいふそのかく物ハ其真を得んや是

序

又余の言をもつて見ん無人表を爭には即ち道せ
拙もし翁を窮妙を集めて一家践なせる能
一家をなして衣妙杯の川のよ具まるもの哉らん
僉題(センダイ)乃意を翁の良居筆景にあらくて筆張
偈(ゲタイ)まして〆やゝおもふに實心樂事も此中余
あらし是又何ぞ余の言を備へん

文政三辰五月

源人題

初日影

汲古閣にて書估鬻ぐ圖

雪中の万歳（せつちう まんざい）

落梅花

春雨に往来

隅田川(すみだがは)遠櫻(えんあう)

雪解川

狂女蝶に戯

目に
青葉山郭公
初松魚

鍾馗

山吹
文鳥
雀
虻
石竹
髪菊
蜂

夏の往来

蛇雉子を巻く

晩暮の山水

夕立（ゆふだち）

秋の七艸

蓮切（はすきり）

山家の月

水邊の月

月下之往来

野分

盲人(めくら)比くハで川越

悟道

郭子儀（くわくしぎ）

雪之曙

餅播（もちつき）

雪の夜

福(ふく)ハ内(うち)

鬼(おに)ハ外(そと)

東都画工　葛飾戴斗筆

尾陽名古屋

校合門人　月光亭墨仙　戴璪　北鷹　月齋哥政

書林

江戸糀町平川町二丁目　角丸屋甚助
尾州名古屋本町七丁目　永樂屋東四郎
同　傳馬町　美濃屋清七
同　中市場町　美濃屋市兵衛
同　小牧町　美濃屋伊[illegible]